

3 ドーナツのおんがえし

ドーナツのおんがえし

コートがないと30分もたないくらいな12月の寒空。あたしはミキたんたちと3人で、ドーナツ屋台前のテーブル囲んでたんだ。

ちらつと車の方を見ると、いつものサングラスが、車の中をひよこひよこ飛びまわってる。お客さんなんて、あたしたちしかいないのに。

それにしても、

「おっそいなあ、せつな」

今日はせつなが日本に来る日。月に1度だけだったのが、少しづつ増えていって、いまはミキたんのお仕事オフ日を選ばないといけないくらい。たくさん会えるようにはなっただけど、毎回みんな、こうして待ってるんだよね。でも、

「今日は、遅いね」

ブッキーがぼつん、と言った瞬間。みんなの視線

が、自然とひとつにあつまった。

「かおるちゃん大魔王さま？」

「おいおい、査問会さもんかいかい？ かいかいかいで貝の口になっちゃうよ。くは」

やっぱ、あやしい。

——かおるちゃんが大魔王　悪い人になりきって、ラビリンズで暴れたのは、いまから3ヶ月前。神さまみたいな扱いされて困ってたから、って、わざとせつなを襲う大魔王になって、ラビリンズの人たちに倒してもらったんだよね。

おかげで、せつなは割と自由に行動できるようになった。日本に来れる日も増えた。けど——

「こんだやったら、タダじゃおかないって言ったよね、あたし」

倒してもらったときの爆発で、1ヶ月も入院してたんだもん。あたしたちや町のみんなが、どんだけ

心配したか

「あはは。たいしたことしてないって」

「あ。なのに、またこうやってはぐらかえ？
たいしたこと!？」

「やっぱ、やってんじゃない!!」

ドンっ、って机たたいて立ち上がったあたしの腰に、ブッキーがしがみついていた。

「まあ、それとあの嬢ちゃんが遅いのは関係ないから。大丈夫じゃぶじゃぶ。がは」

車の中で、手をひらひらさせてるのを見たら、あたしもちよつと落ち着いたよ。かおるちゃん、うそだけはつかないから

腰につかまっていたブッキーをちらつと見たら、すぐ手を離してくれた。あたしが飛び出すの押えてたけど、別にブッキーはかおるちゃんの味方じゃないんだよね。

ブッキーは、ずっとドーナッツ屋台に来てんだもん。かおるちゃんが退院してから毎日。勉強するに

も、なにするにも、パラスルの下に座って、かおるちゃんを監視してるんだ。

「そろそろ、許してあげてもいいんじゃない?」

「ミキたんがとなりから声をかけてきたけど、

「許すとか許さないとか、そんなんじゃないもん」

すぐぶくつと膨れちゃうんだから。こりゃ重症だなあ。でも、一番悪いのは

「かおるちゃん、なにか言わないの?」

そう言っつて詰め寄っても、かおるちゃんはただ笑っつて、

「ま、あげた足は、どっかにおろさなきゃ。揚げ物にはおろしがつきものっつね。げは」

「ああ、遅い」

「あー、遅い」

かおるちゃんのせいじゃない、って言っつなら、なんで遅いのよ、せつなはさあ

そう思いながら、テーブルにあこのせてたら、

5 ドーナツのおんがえし

「ねえ、ラブちゃん」

小さな声が耳元で聞こえた。ブッキー？

「かおるちゃん、変わってない、よね？」

変わって？

「実はね、このあいだなんだけど」

——一週間くらいまえ、わたしはいつも通り、勉強道具持ってこのパラスルの下に来たの。

かおるちゃんは車の中で何か作業してたから、それを見ながらぼーっと終わるの待ってたんだけど

「お、早いねブキ嬢ちゃん。ちょっと待ってて」

って、声が聞こえてきたの。わたしの背中から。

わたしの目には、ドーナツ屋台の中にあるかおる

ちゃんが映っていたのに、振り返ったあたしの前

にも、かおるちゃんがいたの。

「え、と、ちょっと待って」

ここに座ってから、わたしずっと車を見てた。また車を見ればほら、中にかおるちゃんがいて、振り返るとかおるちゃん

「かおるちゃん、かおるちゃんが、えええっ!?!」

目の前ちょっと回っちゃう感じがして、それでもがんばってまた車を見たら、中には誰もいなかったの——

「まさか。双子だなんて聞いてないわよ？」

黙って下むいたブッキーに、ミキたんが素早くそう言った。

「そ、そうだよ。この町に来て長いけど、そんな

こと一度だって」

「実は、どっちか口ポットだったりして」

ブッキーの話に、ミキたんもふたりで、あはははって笑っちゃったけど、心の中は笑ってなかったんだ。

見まちがえるわけないもんね、ブッキーが。また心配のタネ増やしちゃうてるなあ、かおるちゃんはあれ？

「ミキたん、なにしてるの？」

さっき笑ってたときから、なんだか胸のあたりを気にしてるっぽいけど　??

「ええ、ちよつと、新しいブラが硬くて」

新しいの、かあ。ミキたんお仕事の関係で、いろいろ試してるって言ってたもんね　ん？　そういえば、

「せつなも、ちよつと変わったのつけたたよね」

「そうなの？　私は見たことがないけど」

あれ、そうだったけ？　一緒におフロ入っ　ああ、あれってうちでだったっけ。

「せつなちゃんの着けてるのって、ラビリンズ製なの？」

ブッキーが話に乗ってきてくれて、あたしはちよつとほっとした。心配そうな顔、あんま見たくないもんね。

「日本で買ったのもあるみたいだけど、着るものはほとんどそうだって言ってたよ」

あたしが答えたのと同時に、コトツ、って音がして、あたしたちの前にお皿が出てきた。

「ラビリンズの布、質はいいよ。綿がこつちのより柔らかいんだよねえ。もらった生地でエプロン作っちゃったけどさ、オレも」

お皿の上にはドーナツ。ああ、かおるちゃんか

「ふうん、柔らかいんだ。いいわね、私も頼んで買ってもらおうかな。しっかりサポートするのだと、どうしてもアンダー周りまわがスれて痛くなっちゃうから」

ミキちゃんがため息交じりに言ってる。そうだよ。モデルのお仕事で使うのって、あたしたちの普段着よりキッチリしないといけないから　あれ？

「オレの方のツテで取り寄せる？　布ものだったら話は通るよ」

えーっ、とお

7 ドーナツのおんがえし

「なんでかおるちゃん、ブラ話ぼなしなんてしてるんだっけ？」

「ミキさんは首かしげちゃってるし、

「布の話してるだけなんだね、オレ」

かおるちゃんは平気な顔で言っし。なんだろ、これと思ったら、ブックキーが爆発した。

「こんな下着の話に自然に加わらないですよ！ かおるちゃんんんんっ!？」

真つ赤な顔したまま顔を上げて、かおるちゃんに

抗議　まではわかるけど、様子がヘン、だな？

「か、か、かっ　　!」

なに？

「どーしたのブックキー？」

「ちよつと落ち着きなさいよ」

あたしとミキたんがそう言っても、ブックキーは目をまんまるに開いたままで、

「ふ、ふ、ふっ　　!」

そんな、すごい息して　　なんだろ？

「ふえてるっ!」

「ふえてる? 『増える』かな?」

「なに見て　　ええっ!」

ブックキーの見てる方を向いたあたしの前で、かおるちゃんがずらーっと並んでた

「ああ、失敗失敗。切るの忘れてたよ」

あたしたちが3人そろって口開けてる前で、かおるちゃんが平気な顔してそう言ったの。

手元でなにかいじったと思ったら、かおるちゃんの背中にいたかおるちゃん——車からテーブルまで、いっぱいのかおるちゃんが一人つつ、薄くなつて消えていく

「ど、ど、ど!」

「まあ、とりあえず飲んで飲んで」

目の前に出てきたジュースのコップ、ぱっとつかんで口に流し込んで　ああ、おいしいなあ　じゃなくってっ！

「どーいうこと、これはっつ!!」

あたしはパンっ、と立ち上がって、かおるちゃんをまっすぐ睨みつけた。

「　増えてるんじゃないかって、動いた途中の姿が止まって見えてるだけ、ですって。心配ないわ」

え？　いまの声　！

「せつな!!」

かおるちゃんの後ろ、車の影から、赤いコートの女の子。まるい顔に濃い青の髪、1週間ぶりの、本物のせつなだ。

「遅くなってごめんなさい。」

で、ちょっと聞こえてただけけど、ラビリンスのブラが欲しいって言った、ミキ?」

「え、あ、ええ、まあ　」

せつなは、そのままかおるちゃんと入れ替わって、

「日本でのサイズを教えてくださいれば、変換は割と簡単よ。せつながくだし、みんなの分まとめて用意しましょうか——」

あたしの肩を支えて、もとの席に座らせてくれた。自分も空いているイスに腰かけて、そのまま3人でさっきのブラ話が続いている。

けどあたしは、ちょっとへんだな、って思ったんだ。車に戻ってくかおるちゃん見ながら。うーん

「ねえせつな。クリスマスやお正月は、こっちられるの?」

わたしとミキちゃんが、せつなちゃんとブラのサイズの話をしている中、ラブちゃんの顔がいきなりテーブルに割り込んだら、せつなちゃんがびっくりした顔になった。

「え、ええ　」

あら？

「 そうね。クリスマスはお祭りがあるから約束はできないけど、いられるかもしれないわ」

「 せつなちゃん、いまかおるちゃんの方を見てたよ
うな気がするけど？」

「 へえ、ラビリンズのお祭りかあ」

「 簡単なものよ。そもそも今まではなかったんだもの」
「 気にしすぎかな、って思っつて、また話を聞き始め
ただけで、」

「 いいなあ やっぱ、あたしたちも行ってみない？」

「 ほら、プリキユアってバシてますいなら、変装で
もしていくからさ。ね、いいでしょ？」

「 ええと、その」

「 あ、まただよ。せつなちゃん、かおるちゃんのと、
気にしてるみたい」

「 ああ、また止められてるんだ。ねえ、かおるちゃん。
お祭りのときくらい、いいでしょ？」

「 っつて、ラブちゃんが車の方に声をかけたんだだけど、」

返事がなかった。

「 ああーラ、ラブ、ええと、ジュースいる？ いるわ
よね？ね？」

「 え？ せつなちゃんが、いきなり目の前に??」

「 せつな、なにか、隠してるよね？」

「 テーブルの真ん中くらいまで乗り出したせつなちゃんを、
ラブちゃんがじとつとした目で見つめてる。」

「 せーつーなー？」

「 キスでもしちゃうんじゃないか、ってくらい顔近づけて
そう言ったら、せつなちゃんがいきなりパラソルを見上げて、」

「 ええと、その わかったわ。正直に言います。そのお祭りの準備
してるのよ、かおるちゃんは」

「 あっ！ っつて、思わずわたしは声あげちゃった。わかったの、
かおるちゃんがなにをしたのか。」

「 ラビリンズに出張してたんだ！ ここに残ってるふりしながら!!」

「 はあ、っつてため息がひとつ聞こえたと思っつたら、目」

の前の顔が、ちよつと微笑ほほんだわ。

「正解よ、ブッキー。さつき、動きの止まったところが見えてる、って言ったでしょ？」ととてもとても離れているところにいる、同じことなのよ」

やっぱり　でも、

「そんなことしなくても、あたしたちにちゃんと言って、堂々と行けばいいのに」

わたしの思ってること、ラブちゃんが言うてくれた。

「それはね。みんなに、ドーナツを食べて欲しいから、よ——」

え？

わたし、思わずラブちゃんたちと顔を見合わせちゃった。それって、いったいどういう

「みんなが来られない間に、ラビリンスは変わったわ。海で、山で、畑で働いて、自分たちのちからだけで、食べていけるようになった——メビウスの塔のちからがなくて、ね。

この秋、ようやく小麦もとれたし、お砂糖も作れるようになったわ。それで、ドーナツを作ってみんなに食べて欲しい。みんなのおかげで、自分たちを変えたドーナツが作れるようになりましたよって、伝えたいそうなの」

せつなちゃんが言い終わったとき、となりからちつちやな声が聞こえてきた。

「ドーナツで、おんがえし、かあ」

ぼつん、とちつちやな言葉だけど、寒さを忘れるくらい、あつたかい言葉。

「ええ。どうしてもおんがえしがしたい、ここまで復興したんだって見せたい　そう言われちゃったら、断れないじゃない？」

だから、正式にお願いよ。ラビリンスの代表として、3人をラビリンズのお祭りに招待します。来て頂けますか？」

せつなちゃんの真つ直ぐな瞳が、わたしたちを順々に見つめてきて、

「も」

ラブちゃんの口が動いたのを見て、ミキちゃんもわたしに目配せしてきた。うん。

「もっちゃんだよ、せつなっ!!」

ラブちゃんがテーブル越しに飛びつこうとしているのを、両側からふたりで抱きついたので。

「こら、ラブー!」

嬉しいのはいつしよだよ、でも、

「ラブちゃん、正式に。正式に、だよ!」

「わかったよ。それじゃ あたしたち4人、ありがたく招待を受けさせてもらいます。ラビリンズ代表さま」

胸に手をあてて、ゆっくりおじぎするのにな、わたしとミキちゃんも合わせた。正式に、だもんね。それに、

「ラブにあらたまって言われると、照れるわねえ? 4人??」

「うん、もちろん。だってあたしたちは、4人でひ

と組なんだから、ね♡」

そう言う、って信じてたんだ、わたし。ラブちゃんだもんね

「でも、かおるちゃんは大丈夫なの? プリキュアを、神さま扱いしちゃってるからダメだ、って言うてたじゃない」

ミキちゃんがそう訊いたら、せつなちゃんの顔がすこし笑った

「その、かおるちゃんが言うてくれたのよ。プリキュアだけが揃って行ったら、神さま扱いされちゃうかもしれないけど、神さま扱いしない人たちと一緒に連れてったら? って」

せつなちゃんが笑ってる、けど、

「神さま扱いしない人?」

「そう。たとえば、みんなのお母さん。たとえば、駄菓子屋のおばあちゃん。たとえば、そば屋のおにいさん」

「ラビリンズに、クローバータウンのひとたちを呼

んじゃうの!？」

目を丸くしてるミキちゃん見て、せつなちゃんかちよつと困った笑顔になっちゃった。

「ええ。クローバータウンのクリスマスと、ラビリンズのお祭り、このふたつをつなげてしまおうはじめは驚いたわ。私もサウラーもね。ウエスターだけはのんきに言んじやってたけど」

はあ、つてため息がちよつと笑ってる。ふふ。

「でも、もしそれができるなら。おまつりの時だけつなげられるなら」

ラブちゃんの顔も、ぱあつと明るくなった。けど、
「それで、かおるちゃんがこうなってるんだ」

わたしの言葉に、ふたりが振り返ったの。

車の中、さつきからじつと動かないかおるちゃんが、そこにいる。いる、ように見えてるだけ。

「クリスマスまでに間に合つかどうかわからないし、期待させといて裏切れないから、つて。ひとりで準備してるのよ。ここどころ、ずつとね」

そっか。だから、わざわざわたしたちが居る前で、『失敗』したんだ。たまに動かなくても、理由がわかるように

「ありやあ、もうバラしちゃったの? 早いねえ」

そのとき、みんなが車を見る後ろから声が聞こえてきた。かおるちゃんの声が。

「やれやれ、サプライズしたかったんだけどねえ。くはっ」

「かおるちゃん!!」

わたしたち3人が同時に立ち上がって、かおるちゃんに詰め寄ろうとしたんだけど、

「んじゃあちようどいい。ほい、おみやげ」

目の前に手が伸びてきて、3人とも動きが止まっちゃった。

手の上にはお皿。甘い匂いの向こうには、穴の開

いた丸がよつっ——ドーナツ？

「ま、食べてよ。ラビリンズ製の試食品、たったい
ま揚げたての第一号。記念品だよ」

言われて、みんなで一つづつ取ったの。言いたい
ことはいくつもあるけど、ラビリンズの人を作って
くれたものなのなら うん、まずは、ない、け
ど、ね

「まつずいなあ——」

あ、ラブちゃん。

「ラ、ラブ!? っと」

びっくりした目で飛び出してきたせつなちゃんを、
わたし、肩に手をおいて押えたわ。

「ブッキー? でも、ラブが」

また走り出しそうなせつなちゃんを、今度はミキ
ちゃんも一緒に押さえてくれた。わかるよ、そうだ
よね。大切な、ラビリンズのひとたちの作ったもの
だもん。でもね、

「ありがと。でもこれなら、あたしの方が美味しい
の作れるぞぉ♡」

「ちよ、ちよっとラブ、いつたい ええっ?!?」

ラブちゃんの言葉を聞いて、一斉に笑い出したわ。
わたしも、ミキちゃんも、かおるちゃんまで。

「やつぱ、ラブ嬢ちゃんは覚えてたねえ。ぐはっ」
せつなちゃんが目、ぐるぐるしちゃうてる。そろ
そろ、ちゃんと説明してあげなくちゃ。

「せつなちゃん、これね、かおるちゃんとわたした
ちのやりとりなんだよ。7年前の」

「公園の隅っここにあるちゃんが、おなか空かせて
倒れていて」

「あたしたちが作ったドーナツを、食べさせてあげ
たんだ」

わたしと、ミキちゃんと、ラブちゃんと。3人で
囲んで話してあげたら、せつなちゃんの目が、よう
やく真っ直ぐになった。

「それで、『自分のほうが美味しいの作れるぞ』?」

「そう。あたしたちへの、ドーナツのおんがえし
 それがああ、ドーナツ屋さんのはじまりだよ。ね、か
 おるちゃん？」

ラブちゃんが残りのドーナツを口に押し込みなが
 ら、にこにこ顔でそう言ったら、かおるちゃんが口
 もとだけ笑いながら頭をかいちゃった。

「そうそう。ドーナツでおんがえしするんだったら、
 ちゃんとうまいもの作ってもらわないとね。ぐ
 はっ」

そっか。だからなんだ。

たくさん時間をかけて、作り方をひとつひとつ、教
 えてあげてるんだね。『おんがえし』したいひとたち
 へ、『おんがえし』されるひとたちにはナイショで

「ああ。ついでに、ラビリンズ製の服も全員分たのん
 できたよ。お嬢ちゃんの言ったブラも下着も、サ
 イズぴったりのをね。げはっ」

「え　？」

思わずわたし、動きが止まっちゃった。目だけ動
 かしたら、ラブちゃんたちも止まってる。

もちろん、ふしぎじゃないよ。わたしたちのサイ
 ズくらい、かおるちゃんが知ってたって。でも、で
 もおっつ！

「ひとにまで、教えないでっつ！！」

—おしまい—